

# 納骨という営みによる心理的変容 —配偶者を亡くした人への聞き取り調査から—

Psychological Changes due to the Process of Laying Ashes to Rest:  
Hearing Research to the Person who Lost Spouse

西岡 秀爾・坂口 幸弘  
Shuji NISHIOKA and Yukihiro SAKAGUCHI

## 〈要旨〉

本研究の目的は、配偶者を亡くした人にとって、亡き伴侶の「遺骨を手放すこと（納骨）」によってどのような心理的変容があるかを明らかにすることである。納骨を実施した19人の配偶者を亡くした人によって語られた言語データを MAXQDA2018 による継続的比較法によって分析し、伴侶の遺骨を手放すことで生じる変化を検討した。その結果、7のカテゴリー、14のサブカテゴリー、36の概念が生成され、心理的変容が明らかになった。多く語られたセンテンス順に、【安心感の喚起】・【スピリチュアリティの覚醒】・【変容なし】・【寂寥感の増幅】・【困惑の顕現】・【後悔の念の生起】・【諦念の到来】が見出された。特に、寂寥感・困惑・後悔の念が生じる場合があるため、ビリーブメントケアの観点からは、遺族はイエや地域のしきたりを考慮しつつも、焦ることなく、各家にとっての納得できる「納骨のあり方（遺骨の処し方）」について検討を進める必要性が示唆される。

キーワード：配偶者との死別、ビリーブメント、供養、納骨、遺骨の処し方

## 1. 研究背景

### 1-1. 先行研究

亡き人の供養法（弔い方）は、時代・風土・文化などによって大きく変化するの周知の事実である。わが国でも現在のように火葬が定着していなかった時代は、土葬<sup>1)</sup>が主な埋葬法であった。しかし、火葬文化が広がり<sup>2)</sup>（2017年には火葬率99.97%にまで普及）、総じて遺族（以下、本研究で表記する「遺族」は、家族・親族に限定せず、故人の死を憂う恋人・友人なども含める）の手元には遺骨<sup>3)</sup>が残る形となり、納骨<sup>4)</sup>という行為が定着していった。だが、「遺骨の処し方<sup>5)</sup>（遺骨にまつわる事柄）」は、宗教の形骸化（島蘭 2000・2010、坂口 2010：147-148）、供養の多様化・自由化・個人化・簡素化<sup>6)</sup>、地縁・血縁関係の希薄化などに伴い、遺された者にとって容易ではない決断としてのしかかりつつある<sup>7)</sup>と考えられる。なかでも、納骨に注目すれば、最近まで家墓・合同墓・納骨堂に納めるのが一般的であったが、手元供養・分骨・散骨・樹木葬・ゼロ葬（火葬場で遺骨を引き取らない）など、選択肢が増える傾向にある（中村 2006、島田 2014）。

ちなみに、筆者が僧侶として遺族とかかわるようになり約15年になる。そんななか、遺族が

亡き大切な人の遺骨に対して、一通りでない思いを抱く姿を数多く見てきた。特に、納骨文化<sup>8)</sup>の土壌ゆえ、いつ頃までに行うべきか、分骨<sup>9)</sup>してもよいのか、手元供養のままでよいのか、などの悩みである。土葬が主流であった時代には、腐敗による変化を避けるために早期に埋葬がなされていた。しかし、火葬が主流になると、火葬の後に残る遺骨は腐敗による変化に気を配る必要が少ないため（鯖田 1990：75）、かえって各遺族は「遺骨の処し方」の判断に迷う場合が生じてきたという見方もできる（碑文谷 2006：97-99）。

さて、わが国の古代においては、今よりも霊魂に対する意識は強かったが、遺体・遺骨へのこだわりは薄かったという。中世になると、納骨信仰が出現し始め、遺骨に対する関心が一部見られるようになる。そして、近世になると、家制度の広がりと共に、家墓（各家の継承墓）が建立されるようになり、墓に納める先祖や家族の遺体・遺骨への関心が高まってくる。さらに、近代になると、先述したように火葬の割合が高くなることに伴い、手元に遺骨が残ることになり、次第に遺骨は故人の供養における重要な役割を持つようになってきたといわれる（田中 1967、山折 1986・1993、藤井 1988、中村 1999、佐藤 2008、上村 2013、関沢 2015、富井 2016）。

現代になると、たとえば、社会学者の大村（2001：303-304）は、「死後世界のイメージの貧困こそが、今に『遺骨新宗教』とでも呼べそうな諸種の葬送を生みだしている」と論じる。また、宗教学者の山折（2011：57）は、現代日本人は山岳信仰（魂は山に昇る）や浄土信仰（故人は西方浄土に旅立つ）などの観念を持ちにくくなってきたため、遺骨や墓など目に見えるわかりやすい部分だけに意識が向かわざるを得なくなり、骨にこだわる（遺骨崇拝）傾向<sup>10)</sup>が高まり、「遺骨にこだわる文化<sup>11)</sup>」（同上：41）が築かれたと指摘する。さらに、解剖学者の養老（1992：41）は、遺骨に関して、遺体と異なり変化しにくい性質に注目し、だからこそ故人の「カタミ（ミのなごり）」となり、この世に確かに生きていたという「証文みたいなもの」になり得ると分析する。

そして、社会学者の井上（2004）は、本調査の対象と同じく、配偶者を亡くした人とその伴侶の遺骨との関係性について以下のように指摘する。

- ①「残された高齢者は、故人となった配偶者がまるで生きていたかのように遺骨と対話しそれが『生きがい』にもなっている」（同上：65）
- ②「『遺骨』が大事にされ、その遺骨を屋外の墓ではなく、『自宅』に安置する人が増えている」（同上：65）
- ③「伝統的な靈魂観や他界観が意味を失った現代人に、故人の生きた証を示すものは、故人そのものの一部として残った遺骨である」（同上：79）
- ④「遺骨は、これまで一緒に暮らした『故人の一部であるという確かな存在感』と、その『分配性』『携帯性』において、夫婦を単位とした核家族の死者祭祀に親和性が生じる」（同上：83）

以上、現代日本人遺族の傾向として、遺骨は「故人の生きた証」・「故人そのものの一部」・「証文」・「カタミ」のような存在としてみなされ、なかには自宅に安置し、祀り、対話する対

象<sup>12)</sup>とする人たちもいることが確認できる。このように大切な人が亡くなると、遺された人は亡き人とのつながりをどうにかして保とうとする。そのつながりを「形」として残したい人もいれば、「記憶」として残せば充分という人もいる<sup>13)</sup>。遺骨の手元供養（安置）<sup>14)</sup>などは、前者の産物といえる。

## 1-2. 新聞記事に見られる現代日本人遺族の「遺骨の処し方」

さて、ここからは、現代日本人遺族の「遺骨の処し方（遺骨にまつわる事柄）」を把握するために、新聞記事（二次資料）に掲載された遺族の声や行いから、その特徴を概括的につかみたい。留意すべき点は、世間の耳目を集める事故・事件・災害などによる遺族の声であるため、ある程度の特異性が認められるかもしれないことである。近年の状況を把握するためにも、2000年以降の新聞記事を対象に、25人の遺族（父親9人・母親5人・親1人／寡婦4人・寡夫1人／きょうだい2人／子ども2人／祖母1人）の声を拾った<sup>15)</sup>（【表1】）。亡くした対象は、子ども15人、配偶者5人、きょうだい2人、親2人、孫1人という内訳である。死別経過年数は4カ月から17年まで、未納骨が17人（N1～N17）、納骨済が8人（N18～N25）である。特徴として、以下の五点が挙げられる。

第一は、愛する人を失い悲嘆に暮れる遺族にとって、遺骨は「故人の身代わり」的な意味合いを有していると考えられる。これまで通り亡き人と「共に過ごしたい（N2, N3, N4, N6, N7, N15, N21, N25）」・「手放したくない（N2, N8, N9, N10, N11）」という思いから、遺骨を故人代わりとして生活を共にするのである。具体的に言えば、遺骨の傍で就寝したり（N2, N3, N4）、食事したり（N6）、話しかけたりする（N17）。他にも、自らが亡くなった後に一緒に散骨してほしい（N1）、寒い日の納骨は故人が可哀想（N18）、故人のお気に入りの玩具を遺骨の傍に置く（N12）など、遺骨を擬人化する様子が散見される。

第二は、遺族の気持ちの整理と納骨には関連が見られる。納骨によって改めて故人の死を受容する場合もあれば（N18）、「区切り」のために納骨を遂行する場合もある（N19）。

第三は、納骨という営み（遺骨を手放すこと）は遺族にさまざまな感情を引き起こすと考えられる。遺族が「ほっとした」という安心感を覚えたり（N20, N23）、故人が「ゆっくり休める」・「安心できる」という意味で安心感をもたらしたりする（N19, N25）。一方で、アンビバレントな「寂しい」という寂寥感を生じさせる（N19, N20, N22）。

第四は、遺族の気持ちの未整理と未納骨には関連が見られる。「気持ちの整理がつかない」・「踏ん切りがつかない」ゆえに納骨しないという（N5, N7, N10, N13, N16）。

第五は、未納骨ならびに手元供養という選択（遺骨を手元に置くこと）も遺族に多様な感情を生じさせると考えられる。たとえば、N8さんのように、「お墓でゆっくり眠ってほしい」と思う反面、「いつもそばに置いておきたい」といった相反する感情である。遺骨が手元にあるという安心感の一方で、眠らせてあげられないという罪悪感がある。また、納骨しないといけないという納骨規範に縛られつつ手元供養している場合もある（N2）。なかには、一部の遺骨を手元に置くこと（分骨）によって、納骨できる人もいる（N24）。

以上、現代日本人遺族の「遺骨の処し方」の特徴として、遺骨を故人の身代わりとして接す

表1 新聞記事に見られる現代日本人遺族の「遺骨の処し方」

	遺族	遺族年齢	死別経過期間	故人	故人年齢	死因	納骨状況	遺骨の処し方 (要旨抜粋)	新聞 (掲載年月日)
N1	妻	79歳	4カ月	配偶者 (夫)	81歳	病死 (がん)	未納骨	・「私も同じ姿になったら、2人一緒に散骨してもらうつもり」 ・孫はいるが、後の代が続く保証がないため、墓には入らないと選択	毎日・東京朝刊 (2014.10.24)
N2	夫	58歳	2年	配偶者 (妻)	51歳	事故死 (鉄道)	未納骨	・「寂しくなるだろうけど、やっぱり納骨しないよね」 ・「1日の報告を必ず仏前でしています。寂しがらるだろうと思って私はずっと仏前で寝てる。納骨するまではね…。納骨したらね、寝室で寝るようになるんやろうね。それまでは、ここにいるから」	毎日・大阪朝刊 (2007.4.21)
N3	妻	38歳	4年	配偶者 (夫)	34歳	事故死 (鉄道)	未納骨 (納骨予定)	・3年間は、寂しくて寝室に入らず、遺骨のある居間に布団を敷いて横たわる日々 ・手放せなかった遺骨も、丸4年を迎える日に夫の実家の墓に納骨予定	日経 (2009.4.18)
N4	父	58歳	1年	子 (長女)	21歳	事故死 (鉄道)	未納骨	・一周忌が過ぎた今も、故人の遺骨の横で寝る	産経・大阪朝刊 (2006.4.30)
N5	母	43歳	1年	子 (男子)	17歳	事故死 (水難)	未納骨	・納骨する気になれず、墓も用意していない	産経・東京夕刊 (2002.3.1)
N6	父	40歳	1年	子 (女兒)	6歳	事故死 (公園内事故)	未納骨	・毎朝の食卓には遺骨の入った骨つばを置いて一緒に食事を取る ・転動が多いため、いつもそばにいられるように納骨の予定はない	読売・岐阜朝刊 (2013.11.19)
N7	父	47歳	1年	子 (次男)	9歳	事故死 (車・過失運転致死)	未納骨	・「気持ちの整理がつかない。成人式までは一緒に過ごしたい」	日経・名古屋朝刊 (2017.10.25)
N8	父	39歳	2年	子 (女兒)	8歳	事故死 (車・無免許運転)	未納骨 (納骨予定)	・三回忌に合わせ、墓地に納骨予定 ・「お墓でゆっくり眠ってほしい」と思う一方、「いつもそばに置いておきたい」と納骨せずにいた	産経・大阪朝刊 (2014.4.22)
N9	父	64歳	2年9カ月	子 (女子)	29歳	事故死 (車・飲酒ひき逃げ)	未納骨	・仏壇の写真のそばにピンク色の箱に遺骨をいれて安置 ・「納骨すると、また掘り出してしまいそうな気がして…」	読売・北海道朝刊 (2017.4.21)
N10	母	60歳	4年	子 (長男)	31歳	事故死 (鉄道)	未納骨 (納骨予定)	・この4年、遺骨を手放さず踏ん切りがつかず、手元に置いてきた ・事故5年になる来春、樹木葬を予定	毎日・大阪朝刊 (2009.4.26)
N11	父	52歳	6年	子 (次男)	18歳	災害死 (地震)	未納骨	・七回忌は、一つの区切りだと言いつける ・息子をなしたくないため、納骨はできない	産経・大阪朝刊 (2017.3.12)
N12	親		8年7カ月	子 (次男)	4歳	事故死 (医療事故)	未納骨	・死から約9年だが、遺骨は納骨できずにいる ・自宅居間で、遺骨は故人の大好きだったウルトラマンの人形に囲まれている	産経・東京朝刊 (2008.2.13)
N13	母	61歳	10年	子 (女子)	19歳	事故死 (遊園地設備事故)	未納骨	・故人の遺骨は今も納骨していない ・「10年は区切りにはならない。〇〇に会いたい」	読売・大阪朝刊 (2017.5.5)
N14	父	63歳	10年	子 (長男)	13歳	自死 (いじめ)	未納骨	・遺骨は自宅に置いたままだが、調査委最終報告を受け、「一つに区切り」となった ・「年内にも納骨したい。ゆっくり眠ってほしい」という心境	読売・千葉朝刊 (2019.7.4)
N15	母	66歳	15年	子 (三男)	19歳	事故死 (車・飲酒ひき逃げ)	未納骨	・今も〇〇(故人)と一緒に暮らしているとの思いから、まだ納骨していない	読売・茨城朝刊 (2016.12.18)
N16	父	62歳	17年	子 (次男)	10歳	事故死 (水難)	未納骨	・「気持ちの整理がつかず、納骨もしていません」	読売・夕刊 (2012.11.1)
N17	祖母		1年	孫 (女子)	18歳	殺人	未納骨 (納骨予定)	・自宅に置いた故人の遺骨の入った箱に触れ、「行って来るね」「帰ってきたよ」と声を掛ける ・一周忌に納骨するが、それまでは気持ちに区切りをつけれなかった	読売・大阪朝刊 (2003.8.27)
N18	妻	75歳	1年	配偶者 (夫)	74歳	災害死 (土砂)	納骨	・小雪の振る12月下旬に納骨。「こんな寒い日に入るんか。お父さんがかわいそう」と涙がこぼれた ・この時、夫の死を受け入れた	日経・夕刊 (2015.8.20)
N19	妻	37歳	2年2カ月	配偶者 (夫)	34歳	殺人 (暴力団射殺事件)	納骨	・夫の死を認めたくないという思いなどから納骨をせずにいたが、「区切りをつけるには大切な儀式」と思い実施 ・「気持ちの区切りをつけたい、きちんと供養してゆっくり休んでほしいなど、いろんな気持ちが入り乱れている。でも、やっぱりさみしい気持ちもある」	読売・佐賀朝刊 (2010.1.25)
N20	母	59歳	2年4カ月	子 (長女)	28歳	災害死 (地震)	納骨	・「寂しいのが半分以上だが、でもほっともした。これからはお墓に行つて〇〇(故人)に家では言えない愚痴を聞いてもらおうかな」	毎日・西部朝刊 (2018.8.20)
N21	父	45歳	6年	子 (女兒)	8歳	事故死 (車・ひき逃げ)	納骨	・「事件が解決するまではそばにいたい」と、仏壇脇に安置してきたが、七回忌を機に納骨 ・気持ちの整理がつかず、なかなか納骨できなかったが、捜査に進展がないまま時間だけが過ぎ、「お墓がないままなのはかわいそう」という心境から実施	読売・大阪朝刊 (2007.6.8)
N22	妹	31歳	5年	きょうだい (兄)	31歳	事故死 (鉄道)	納骨	・樹木葬 ・「遺骨を手放さず寂しさは消えないけど、前を向いて生きていくよ」	日経 (2010.3.27)
N23	兄	66歳	6年	きょうだい (弟)	58歳	災害死 (地震)	納骨	・2016年11月末に遺骨(右土腕骨)が見つかり、2017年4月に先祖代々の墓に納骨 ・「やっとな、ほっとしたよ」	毎日・宮城 (2017.4.7)
N24	子 (長女)	52歳	約半年	親 (父)	82歳		納骨	・永代供養納骨堂に納める ・手元供養(遺骨の一部を地蔵型オブジェに)「手元にあればいつでもお墓参りができる」 ・「絶対にこうしなければならないという決まりはないと、分かったことが新鮮だった」	日経・夕刊 (2009.8.11)
N25	子 (次女)	65歳	1年	親 (母)	91歳	災害死 (地震)	納骨	・「母にそばにいてもらいたい」という気持ちから遺骨をしばらく自宅に安置していたが、「母に安心してもらわない」と気持ちに整理をつけ、先祖代々の墓に納骨	読売・千葉朝刊 (2012.3.12)

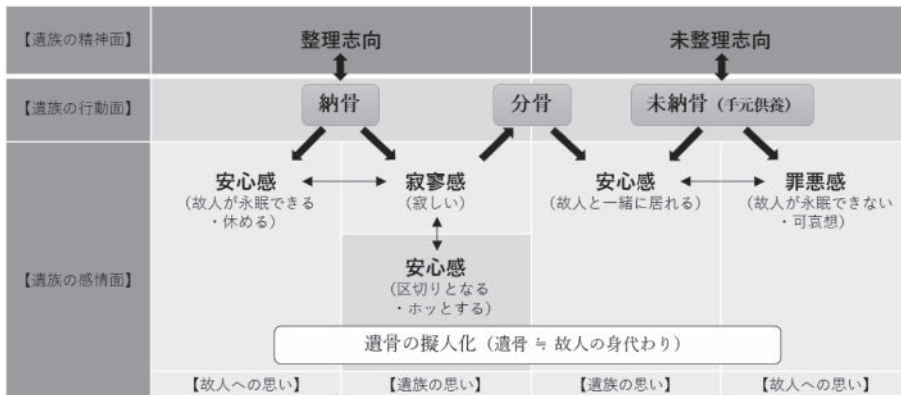


図1 遺族の心理傾向と「遺骨の処し方」との関係

るといった「遺骨の擬人化」が挙げられる。さらに、遺族の心理傾向と「遺骨の処し方」には関連が見られ、遺族にとって遺骨を手放して納骨するにしても、手元に安置するにしても、一樣でない感情をもたすことが示唆される（【図1】）。言うまでもなく、遺族のなかには遺骨に対して関心を示さない場合<sup>16)</sup>もあり、これらの特徴は大切な人の遺骨へのこだわりが多少なりともある人たちに限った事象に他ならない。

### 1-3. 先行研究の問題点

配偶者との死別によって生じる身体的・社会的・心理的な影響に関する国内研究は、河合（1987a・1987b）、岡村（1992）、坂口（2001）、坂口・柏木・恒藤（2001）などを嚆矢として多数の研究がある。なお、遺骨ではないが、形見（遺品）と悲嘆との関連についての研究は若干見られる（池内 2006・2007）が、配偶者を亡くした人の「遺骨を手放すこと（納骨）」に着目した調査は管見の限り見当たらない。

前節で確認したように、現代日本人遺族の傾向として、遺骨を故人の身代わりとして接するといった「遺骨の擬人化」が挙げられるが、その「遺骨を手放すこと（納骨）」に伴う遺族の心境については、遺族支援（ビリーブメントケア）の観点からも重要であるにもかかわらず十分に明らかにされていない。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、配偶者を亡くした人が亡き伴侶の「遺骨を手放すこと（納骨）」によってどのような心理的変容があるかについて明らかにすることを目的とする。「納骨」に伴う心理的変容の一端を把握することにより、より良い遺族サポートのあり方を見つめ直したり、現行の供養のあり方を問い直したりする一助となればと期する。



### 3. 研究の方法

#### 3-1. 調査対象

対象は、理論的サンプリング方法により、都市部にある大手葬儀社<sup>17)</sup>が開催している遺族会に参加したことがある配偶者を亡くした人とした。配偶者を亡くした人を対象にした理由は、わが国では「夫婦のみ世帯」・「単独世帯」が増加する状況下<sup>18)</sup>、悲嘆を一人で抱え込まざるを得ない人たち<sup>19)</sup>が予想され、その実態把握や今後の支援対策につながると考えたからである。加えて、調査に協力いただいた遺族会の参加者の過半数が配偶者を亡くした人であり、質的データ分析において重要となる一定の対象数が得られると期待されたからである。

研究協力者は、次の条件に該当する者である。① 配偶者を亡くした者、② 死別後、六か月以上、十年未満の者、③ 国内で死別を経験した日本人の者、④ 研究の趣旨に賛同し、同意の得られた者、⑤ 死別やその悲嘆をある程度冷静に語れる者、の五つである。調査に対して、19人の協力が得られた。主な質問内容は、「納骨のきっかけ」・「納骨時の心境」「納骨の前と後での気持ちの変化」・「遺骨に対する思い」などである。

#### 3-2. インタビュー調査およびデータ収集の方法

研究デザインは質的帰納的研究<sup>20)</sup>であり、半構造的インタビューにより、研究協力者一人につき約60分～90分のインタビュー面接を実施した。調査実施については、事前に研究協力者に対して、インタビュー調査の主旨および任意性、匿名性、個人情報の遵守、データの取り扱い、研究結果の提示などを説明した。

半構造的面接法を用いた理由は、「納骨（遺骨を手放すこと）は、配偶者を亡くした人にどのような心理的変容を及ぼすのか」を明らかにする上で、協力者の自由な語りこそが重要であると考えたからである。事前に本研究の目的に即したインタビューガイドを作成したが、調査時は可能な限り自由な語りを重視しながら面接を実施した。調査期間は、2018年6月中旬から8月上旬までである。同意を得た上でインタビューをICレコーダーに録音し、すべて逐語化した。

#### 3-3. 倫理的配慮

インタビューに際して、研究協力者のプライバシーの保護および話題に挙がる人物や場所に関する個人情報の保護、そして、調査結果を報告する際には、個人の特定ができる内容にはしないことを、書面ならびに口頭で説明し、承諾を得てから調査研究を開始した。また、録音したデータならびに逐語化したデータの保管には厳重に注意を払った。なお、本研究の実施にあたっては、関西学院大学の「人を対象とする行動学系研究倫理委員会」（番号2018-14）の承諾を得た。

#### 3-4. 分析方法

配偶者を亡くした人にとって、「納骨（遺骨を手放すこと）」によってどのような心理的変容があるのかを明らかにするために、逐語化したデータの分析は、Kuckartz（2002/2018）・佐藤

(2008a・2008b)の質的データ分析法(継続的比較法)を採用し、MAXQDA2018ソフトウェアを用いて行った。まず、研究協力者およびインタビュー内容に含まれるすべての固有名詞が特定されないようにした。そして、逐語化したデータを繰り返し読み込み、文脈に注意しながら意味のまとまりごとにコード名をつけていき、共通のコードをあわせて概念とした。意味内容が関連する概念からサブカテゴリーを生成し、さらに上位概念のカテゴリーを生成した。なお、複数回にわたり一連の作業を実施し、分析結果の向上に努めた。加えて、死生学を専門とする大学教員1名と社会福祉学を専攻する大学院生2名との計3名によるメンバー・チェックングを行った。

#### 4. 研究結果

##### 4-1. 研究協力者の基本属性と納骨時期

研究協力者は19人(寡夫10人・寡婦9人)で、平均年齢は69.8歳。死別後の経過期間は平均4年1カ月。住居形態は、一軒家10人(53%)、マンション9人(47%)。世帯構成は、独居17人(89%)、同居2人(11%)。子どもの有無は、いる17人(89%)、いない2人(11%)。納骨時期<sup>21)</sup>は、四十九日6人(32%)、百箇日1人(5%)、一周忌9人(47%)、三回忌2人(11%)、四年経過頃1人(5%)であった(【表2】)。ちなみに、喉仏などを分骨して手元に安置する人も、7人(B, F, G, H, P, R, S/37%)見られた。

表2 研究協力者の基本属性

協力者	性別	年齢	死別経過期間	住居	世帯構成	子の有無	納骨時期	分骨の実施
<b>寡夫10名(A～J)</b>								
A	男	60代後半	10カ月	マンション	独居	有	四十九日	無
B	男	60代半ば	1年2カ月	一軒家	独居	有	四十九日	有(喉仏)
C	男	80代後半	2年2カ月	一軒家	独居	有	一周忌	無
D	男	60代後半	2年6カ月	マンション	独居	有	三回忌	無
E	男	70代前半	2年11カ月	マンション	独居	無	一周忌	無
F	男	60代前半	3年10カ月	マンション	独居	有	一周忌	有(一部)
G	男	60代後半	4年11カ月	一軒家	同居	有	四十九日	有(喉仏)
H	男	60代後半	5年3カ月	一軒家	独居	有	一周忌	有(喉仏)
I	男	70代後半	5年4カ月	マンション	独居	有	一周忌	無
J	男	70代後半	6年9カ月	一軒家	独居	有	一周忌	無
<b>寡婦9名(K～S)</b>								
K	女	60代後半	1年4カ月	マンション	独居	有	四十九日	無
L	女	60代半ば	3年4カ月	一軒家	独居	有	百箇日	無
M	女	80代前半	3年6カ月	一軒家	同居	有	三回忌	無
N	女	60代半ば	3年7カ月	一軒家	独居	有	一周忌	無
O	女	80代前半	4年7カ月	マンション	独居	有	一周忌	無
P	女	60代半ば	4年11カ月	マンション	独居	無	四年	有(喉仏)
Q	女	60代半ば	5年4カ月	一軒家	独居	有	四十九日	無
R	女	60代前半	7年8カ月	マンション	独居	有	一周忌	有(一部)
S	女	60代前半	7年11カ月	一軒家	独居	有	四十九日	有(喉仏)

#### 4-2. カテゴリー、サブカテゴリー、概念の生成

MAXQDA2018 ソフトウェアを用いた継続的比較法による分析の結果、19 人の発言データから 7 のカテゴリー、14 のサブカテゴリー、36 の概念が生成された（【表 3】）。カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉、概念は“ ”で示した。各々の最後に文書セグメント数を（ ）内に表示した。また、具体例の文末にあるアルファベットは、【表 2】の研究協力者を示す。

##### カテゴリー 1：【安心感の喚起】

このカテゴリーは、最も多く語られたセンテンス内容である。〈自らに湧き起こる安心感〉と〈故人の安寧につながる安心感<sup>22)</sup>〉に大別できる。

前者のなかでも“一区切りによる安心”は、いずれ納めるのであれば親族が多く集まる早い段階での法要（四十九日、一周忌）などで実施することで、「区切り（F, G, I, Q）」・「一区切り（D）」・「一段落（G）」となり、「落ち着いた（G, M）」・「整理がついた（N）」・「ホッとした（Q）」などの気持ちが表明された。また、“分骨による安心”は、喉仏（B, G, H, P, S）や遺骨の一部（F, R）を分骨し、仏壇などで安置することによって「本家本元はここにまだおる（H）」・「寂しくない（Q）」という心境のなかで胴骨を納めやすくなることがうかがえた。さらに、手元に残している分骨は、自らが亡き後に自身の亡骸と一緒に納めてほしい（B, H, S）、もしくは自らが旅立つ時に身につける見込みという人（R）もいた。他にも、「納骨を済ませないといけな（L）」・「私に課せられた義務（Q）」といった思いの人は、“役割遂行による安心”を覚え、宗派に対する帰属意識の高い傾向の人は、“開祖の眠る本山に納められた安心”を抱いたようである。

後者のなかでは、「土に還る（F, N, O, S）」・「自然に戻っていく（D）」など“自然（土）に還る安心”や“故人が落ち着けた安心”が多く語られた。他にも、「浄土（G）」・「向こう（M）」・「天国（P）」などの“あの世（彼岸）に送った安心”、「家内の母親（A）」・「お父さんお母さん（J）」・「主人の父（R）」・「ご先祖さま（S）」などの“先祖・家族が眠る場所（此岸）に送った安心”など、次の住み処に見送ったことによる心の落ち着きも見られた。

##### カテゴリー 2：【スピリチュアリティ<sup>23)</sup>の覚醒<sup>24)</sup>】

このカテゴリーは、〈納骨場所へのお参りの習慣化〉・〈納骨場所での故人への働きかけ〉・〈納骨場所に故人がいるという信心〉の三分類である。

第一のなかでは、原則「月 1 回（B, D, O）」、あるいは「週 4・5 回（F）」など“墓参りの習慣”が最も多く、続いて“納骨堂参りの習慣”や“合祀塔・供養塔参りの習慣”など、死別後の変化として遺骨を納めた場所に足繁く通うことが確認できる。第二は、墓は「（あの世への）通路（Q）」と考えたり、仏壇ではなく墓だけに“話かける”人（F）もいれば、故人の好物などの“お供え物をする”人（D）もいたりなど、故人との交流を保とうとすることがうかがえる。第三は、「骨があるところにいる（E）」・「お墓におる（G）」・「主人がそこにいる（S）」といった“臨在感<sup>25)</sup>の発生”や「そばにいてほしい（F）」といった“随伴の希求”など、故人は納骨した場所に居続けてくれているという信心<sup>26)</sup>が芽生える傾向にあることが理解できる。



### カテゴリー 3：【変容なし】

実際には多少の変容が生じている可能性が高いが、本人の認識や語りからは変わりが確認できないカテゴリーである。〈感情の起伏なし〉と〈後悔の念なし〉に区分された。

前者のなかでは、納骨の前後において気持ちの変化が「特にない (C, N)」・「変わらない (F)」・「別にない (J)」・「何も感じない (K)」など“変化を感じない”という声もあれば、“強い苦しみゆえ納骨に意識回らず”という声も見られた。他にも“他により所があるため”“遺骨への執着がないため”“遺骨儀式への信仰がないため”などの理由で、気持ちに変化が生じなかったことも認められた。後者では、最終的には自らの意思を優先し (D, F, G, I, K, Q) “納得済みゆえ”、あるいは特に理由はないが“後悔を感じない”など、納骨に関して悔やんでいることはないと言明する場合も少なくないことが確認できた。

### カテゴリー 4：【寂寥感の増幅】

このカテゴリーは、〈遺骨分離による寂寥感〉・〈遺骨不在による虚無感〉・〈一区切りゆえの寂寥感〉の三分類である。

第一は、「別れるのは辛かった (D)」・「あるのとないのと寂しさの具合は違う (I)」・「距離が遠くなったような気もした (S)」といった遺骨と離れる“かなりの寂しさ”や、短期間だが“いくばくかの寂しさ”を感じるなど、程度は異なるものの寂寥感が増えている場合が確認できる。第二は、「本人であった証拠のモノ (D)」・「家内のおった証 (D)」などと表現されるように“故人そのものである証がなくなる虚しさ”や、「繋がっている感じ (D)」が得られた遺骨が仏壇からなくなったことによる“拝む対象のない虚しさ”など、納骨実施までは確かに現前していた遺骨を喪失した虚無感が表明された。第三は、納骨をはじめとする諸々の法事が落ち着いたことなどから生じる“平常化に伴う寂しさ”を吐露する人も見られた。

### カテゴリー 5：【困惑の顕現】

このカテゴリーは、〈身内の納骨規範による負荷〉と〈世間の納骨規範による負荷〉に区分された。

前者は、「姑がいるから『納骨しない』とは言えなかった (L)」・「おばあちゃん (義母) が『あまり長いことを置いておいたらいかん』 (S)」といった“姑からの圧力による戸惑い”、「いつまでも置いておくもんやない (G)」・「仏壇にずっと置いておくのはよくない (H)」といった“親戚からの圧力による戸惑い”、「(四十九日納骨という) 先祖からズーッとそうしていた (I)」といった“イエのしきたりに対する戸惑い”など、身内に存在する納骨規範によるプレッシャーが確認できる。後者は、「いつまでもお骨を置いておくのは良くない (L)」・「四十九日を終わったらお墓に納れるのがしきたり (L)」といった“地域のしきたりに対する戸惑い”、「『1 週間とか 2 週間で納骨した』とかっていう話…それが世間一般の常識なんかな (D)」といった“一般常識に対する戸惑い”など、世間に存在する納骨規範による心理的重圧を感じていたことも認められた。

表3 本研究で見出されたカテゴリー、サブカテゴリー、概念、具体例の一部

カテゴリ	サブカテゴリ	概念	具体例	
安心感の喚起 (66)	自らに湧き起る安心感 (44)	一区切りによる安心 (22)	「3 回忌納骨をもう決めていた。区切りとしてね、早く「区切りをつけたい」という気がありましたね。」(G) 「まあ、人はどう変わるかわからんけど、私は変わりました。やっぱり区切りというのかな、そういうものがあるやっぱあるんじゃないか。」(I)	
		分骨による安心 (13)	「分骨して、喉仏が手元にあることで、違う安心感というか「まだここに」という。自分が亡くなった時は一緒に納骨して、子どもに言うてあるから、(胴骨) 納骨させてもらった」(H) 「胴骨だけは、ある程度世間の皆さんがされる時期に、やっぱりお墓にちゃんと父親が入っていることやしね。あと、こちら(喉仏)は残しておいて、「何かあたら、私も埋めてもいいから」と思っね」(S)	
		役割遂行による安心 (7)	「自分すべてが前にも前に進まないで、それはしましたね。自分でお尻を叩いて「いつまでもここにいたらダメかな」というのがあって (P) 「もうなんかすごい私に課せられた義務と思ってたので…。これですることってホッとしたなあと思う。…もう無事に納骨できて、本当に良かったと思ひました」(Q)	
		間組の眠る本山に納められた安心 (2)	「納骨したら安心します、心が落ち着きます。やっぱり、あの一土地柄もあるかな。〇〇寺(本山)という、宗教的な雰囲気もあるし。まあ、一段落した感じがする」(G)	
	故人の安寧につながる安心感 (22)	自然(土)に還る安心 (7)	「長い間、間違って自然に戻ってましたっていう感じがする」(D) 「納骨は、お墓が済んだらいいかな。…一周忌の前ですわ。それまでは家に置いて。「なるべく早く土に還ってあげた方がいいかな」と思っ」(C)	
		故人が落ち着く安心 (6)	「ずっとここ(家)にあまりよしもやっぱり、まあ、落ち着いてもらえるかな」と、主人が(ん) 「私の場合は、ホッとします。…一応これですること全部したわっていう感じがする。【もう落ち着いてくれればやらないか】と思っ」(Q)	
		あの世(彼岸)に送った安心 (5)	「3 回忌(喉仏納骨)の法要済んで、〇〇寺(本山)に納めて、納骨したということで…お浄土へ往った、成仏したって、成仏したと思っかなあ…。区切りがあると思っしていますよ、私」(G) 「いつまでも置いていたから、「往つて」と思っでも仏土に近づいていけないから。向こうで「ええところに往ってもらいたい」という気持ちが湧いてたの。一つずつ片付けて、お父さんが安心するのによしよ」(M)	
		先祖・家族が眠る場所(此岸)に送った安心(4)	「ただ、【もう早くお父さんお母さんのこへ一緒に行って、仲よくする】って言うて、私は納めたから。家内も喜んでると思ひますけど(ん) (J)	
	スピリチュアリティの覚醒 (36)	納骨場所へのお参りの習慣化 (20)	墓参りの習慣 (15)	「今度納骨したら月 1 回必ず、お墓に行って、お花供えて、好きな甘い食べ物供えて。で、手を合わせて、帰ってくるように」(D) 「私のね、週のうち 4、5 日はお墓参りですわ。そやから、お墓参りに行く通道、家から事務所に行く通道なんどね。だから、お寺の事務所の方の人に「F さんという住職以外では一番よくお墓参りです」って言われた」(K)
			納骨堂参りの習慣 (3)	「毎月、お掃除に行くと、そのたびに「今、来ましたよ」とか、「元気でやっているか?」とか。向こう(家内)は元気なんだけど」(E)
納骨場所での故人への働きかけ (10)		話かける (7)	「時々、寂しくなる時、そんなに寂しかったら「〇〇寺さんに行くかな」と」(K) 「お墓やたら、いつも行っって、今日こんなことがあった」とか「宜しく頼む」とかね、「お願いします」とかね。あと、「愛しています」とかね。今なら言うてますけど、うん」(F) 「10 分間はいるんです。…心の中で「なんであなたが先に逝ったん?」、「どうして私を置いていったん?」、「どうして姑を置いていくん?」という感じが」(L)	
		お供え物をする (3)	「(嫁さん)好きなもの持っって行っ、まあ仏壇にも同じようなもの供えているんですけどね」(D) 「(家内)は「骨があるところに」という感じはいいんですけど、日本人的な感覚なのかな」(E) 「納骨したら、あのー、お墓が、より近く感じます。【主人がそこにいる】という感覚が。実際に、入ってくれているの、それはそれで「まあ、良かったかな」とっ」(S)	
納骨場所にいる故人に感じる安心感 (6)		臨在感の発生 (5)	「残された者の希望として、「そばにいてほしい」という気持ちがすごいあったから、近くに(墓を建てた)」(F) 「それ(気持ち)は変わらないと思ひますわ」(F) 「お彼岸とかお盆とか来るとね、「納めているな」という感じでお参りに行くんです。仏壇に置いている時とない時の気持ち的なものは、別になかったです」(J)	
		随伴の希求 (1)	「(気持ち)は変わらないと思ひますわ」(F) 「お彼岸とかお盆とか来るとね、「納めているな」という感じでお参りに行くんです。仏壇に置いている時とない時の気持ち的なものは、別になかったです」(J)	
変容なし (19)		感情の起伏なし (10)	変化を感じない (5)	「それ(気持ち)は変わらないと思ひますわ」(F) 「お彼岸とかお盆とか来るとね、「納めているな」という感じでお参りに行くんです。仏壇に置いている時とない時の気持ち的なものは、別になかったです」(J)
			強い苦しみゆえ納骨に意識回らず (2)	「その時は大変ショックで夜寝れない、それどころかの状態ではなかった。ショックという苦痛のレベルがものすごく大きいわけですから、納骨したことはこれに比べればかなり下のレベルの話です。まあ前後で、どうという意識はなかったです」(B)
			他にどのようなものか(1)	「(変化)は ないです。まあ、あの一位牌があるすからね…。それが、一つの縁(よすが)ですから」(A)
			遺骨への執着がなくなった(1)	「それはもう変わらないう。うん。…仏壇の前にあつた骨がお墓の中に入っただけで、そりゃ別に(納めたいとか)思っないです」(F)
	後悔の念なし (9)	納骨儀式への信仰がないため (1)	「区切りも私の中にはない。信仰心がないから」(K)	
		納得済みゆえ (7)	「自分はもう意思は…最終的には納骨したらなあかんっていうのはもちろんありましたから、…やるとしたら、まあ 3 年でするって、もうズーッと決めたから…。迷いは全くなかったです」(D) 「別「二四九日に納骨しなくてもいい、ずっと持っていてもいい、自分が納得しまで。私はそれに乗ったわけ、自分でそうしただけ」(K)	
	寂寥感の増幅 (14)	後悔を感じない (2)	「(後悔)は ないです」(E)	
		遺骨分離による寂寥感 (10)	「それが無くなってしまうのは、寂しいのもあって、で、納骨なかなか踏ん切れないなかつたんですけど、…3 回忌をやった時に、納骨させてもらったんです」(D) 「やっぱりね、…お骨のあつたのとないのと、寂しさの具合は違います」(I)	
		遺骨不在による寂寥感 (3)	「寂しいですけどね、もうどっちにしてももう形がないんですから、いつまでもよくよくして、やっぱりあれですからね」(O) 「骨がお墓に納れて、家から本家、まあ言ったら本人であつた証憑のモノがあるから、いまだにそこちよと整理はついてないです。まあ骨もあつて、家の中にあるというはまあ本人がいたという…。それがまあ自分のところのお墓でどうも違う場所に移ってしまったというは、仏壇からなんかボコボコ何かが抜けた気になります。…仏壇に遺骨で存在はちゃんとあるんですけど、そういう気持ちです」(D) 「【つかうらなかつたな】っていう感じがやっぱりするね。…仏壇に毎日手を合わせても、それ遺骨があつたでなかつた感じがする」(D)	
		一区切りゆえの寂寥感(1)	「平常化に伴う寂しさ(1) 「1 年過ぎた後、しみり「寂しいな」と。そういう意味があるのかな、それまで行事があるし、しないといかんこともあるし」(K)	
困惑の顕現 (11)	身内の納骨規範による負荷 (7)	姑からの圧力による戸惑い (3)	「今振り返ると姑がいるから、「墓をつくらない」とか「納骨しない」ことは、言えなかつたと思ひます。姑はそれがあったらまだ思っている。それはできなかったと思ひ、その時は」(L) 「言われたことがありますわ、【いつまでも置いておくもんじゃないか】とか。…お寺さんには言われないけど、親戚です」(G) 「もともと四、五回…忌明けの時には、あの一緒にやる、それが 1 家の「先祖からズーッとそうやってましたから」。親父の代からしか知らんけども、あと、自分もそういうものではあつたんです。…ただ、自分の嫁さんとも違うやうな、アハハ(笑)。…違うなと思う」(I) 「【初盆までに納骨をしない】と、「あたりまえよ、そんなこと」と、田舎では。【いつまでもお骨を置いておくのは良くない】と、そんな雰囲気です。親戚でもそういう風に。仏壇に遺骨を置いておられる方というは知らなかつた」(L) 「…早くもやっちゃうもったいない」【週間とか 2 週間後で納骨した】とかいう話を聞くとあるんですけど、それが【世間一般の常識かな】と思ひながら、【うちはつくつてますかな】っていうのがどっかにありまして」(C) 「今、考えた「二人の遺骨を一緒に」と合葬墓に納めたらうのが良かったかな」と、だんだん月日が経つて考えれば、亡くなった直後から、そんな考え余る余るなく」(L) 「今考えた、うーん、お墓を建てなくて良かったかな。子どもたちに墓守がいなくて。合葬墓の永代供養にすれば良かったかな」(L) 「喉仏だけでも私がお墓に納めず持っっておけば良かったかな」とか。「私が死んだ時に、一緒にしてもらったら良かったかな」と、今になって時間経つてつれ思っうんです」(L) 「仏壇に遺骨を置いておられる方がいいとは思ひなかつた。〇〇の会(遺族会)で、「何年経つけど、お墓に納める気にならないから、置いてます」と。そんなことがあつた。ハア」と、骨を聞いてびっくり「【そういうこともあった】」と」(L) 「で、まあ、それ 1 年経たずに死んでさか、やっぱりお骨がないとなつてくからは、やっぱりもういらないだとい…もう家内の死を受け止めたさうですわ。あのー、今まであんまり受け止めてなかったのもあんやろうけどもね、やっぱり。だから、そっからは、あのー寂しいのが変わりました」(I)	
		親戚からの圧力による戸惑い (2)	「言われたことがありますわ、【いつまでも置いておくもんじゃないか】とか。…お寺さんには言われないけど、親戚です」(G) 「もともと四、五回…忌明けの時には、あの一緒にやる、それが 1 家の「先祖からズーッとそうやってましたから」。親父の代からしか知らんけども、あと、自分もそういうものではあつたんです。…ただ、自分の嫁さんとも違うやうな、アハハ(笑)。…違うなと思う」(I) 「【初盆までに納骨をしない】と、「あたりまえよ、そんなこと」と、田舎では。【いつまでもお骨を置いておくのは良くない】と、そんな雰囲気です。親戚でもそういう風に。仏壇に遺骨を置いておられる方というは知らなかつた」(L) 「…早くもやっちゃうもったいない」【週間とか 2 週間後で納骨した】とかいう話を聞くとあるんですけど、それが【世間一般の常識かな】と思ひながら、【うちはつくつてますかな】っていうのがどっかにありまして」(C) 「今、考えた「二人の遺骨を一緒に」と合葬墓に納めたらうのが良かったかな」と、だんだん月日が経つて考えれば、亡くなった直後から、そんな考え余る余るなく」(L) 「今考えた、うーん、お墓を建てなくて良かったかな。子どもたちに墓守がいなくて。合葬墓の永代供養にすれば良かったかな」(L) 「喉仏だけでも私がお墓に納めず持っっておけば良かったかな」とか。「私が死んだ時に、一緒にしてもらったら良かったかな」と、今になって時間経つてつれ思っうんです」(L) 「仏壇に遺骨を置いておられる方がいいとは思ひなかつた。〇〇の会(遺族会)で、「何年経つけど、お墓に納める気にならないから、置いてます」と。そんなことがあつた。ハア」と、骨を聞いてびっくり「【そういうこともあった】」と」(L) 「で、まあ、それ 1 年経たずに死んでさか、やっぱりお骨がないとなつてくからは、やっぱりもういらないだとい…もう家内の死を受け止めたさうですわ。あのー、今まであんまり受け止めてなかったのもあんやろうけどもね、やっぱり。だから、そっからは、あのー寂しいのが変わりました」(I)	
		イエのしきたりに対する戸惑い (2)	「【初盆までに納骨をしない】と、「あたりまえよ、そんなこと」と、田舎では。【いつまでもお骨を置いておくのは良くない】と、そんな雰囲気です。親戚でもそういう風に。仏壇に遺骨を置いておられる方というは知らなかつた」(L) 「…早くもやっちゃうもったいない」【週間とか 2 週間後で納骨した】とかいう話を聞くとあるんですけど、それが【世間一般の常識かな】と思ひながら、【うちはつくつてますかな】っていうのがどっかにありまして」(C) 「今、考えた「二人の遺骨を一緒に」と合葬墓に納めたらうのが良かったかな」と、だんだん月日が経つて考えれば、亡くなった直後から、そんな考え余る余るなく」(L) 「今考えた、うーん、お墓を建てなくて良かったかな。子どもたちに墓守がいなくて。合葬墓の永代供養にすれば良かったかな」(L) 「喉仏だけでも私がお墓に納めず持っっておけば良かったかな」とか。「私が死んだ時に、一緒にしてもらったら良かったかな」と、今になって時間経つてつれ思っうんです」(L) 「仏壇に遺骨を置いておられる方がいいとは思ひなかつた。〇〇の会(遺族会)で、「何年経つけど、お墓に納める気にならないから、置いてます」と。そんなことがあつた。ハア」と、骨を聞いてびっくり「【そういうこともあった】」と」(L) 「で、まあ、それ 1 年経たずに死んでさか、やっぱりお骨がないとなつてくからは、やっぱりもういらないだとい…もう家内の死を受け止めたさうですわ。あのー、今まであんまり受け止めてなかったのもあんやろうけどもね、やっぱり。だから、そっからは、あのー寂しいのが変わりました」(I)	
		世間の納骨規範による負荷 (4)	地域へのしきたりに対する戸惑い (2)	「【初盆までに納骨をしない】と、「あたりまえよ、そんなこと」と、田舎では。【いつまでもお骨を置いておくのは良くない】と、そんな雰囲気です。親戚でもそういう風に。仏壇に遺骨を置いておられる方というは知らなかつた」(L) 「…早くもやっちゃうもったいない」【週間とか 2 週間後で納骨した】とかいう話を聞くとあるんですけど、それが【世間一般の常識かな】と思ひながら、【うちはつくつてますかな】っていうのがどっかにありまして」(C) 「今、考えた「二人の遺骨を一緒に」と合葬墓に納めたらうのが良かったかな」と、だんだん月日が経つて考えれば、亡くなった直後から、そんな考え余る余るなく」(L) 「今考えた、うーん、お墓を建てなくて良かったかな。子どもたちに墓守がいなくて。合葬墓の永代供養にすれば良かったかな」(L) 「喉仏だけでも私がお墓に納めず持っっておけば良かったかな」とか。「私が死んだ時に、一緒にしてもらったら良かったかな」と、今になって時間経つてつれ思っうんです」(L) 「仏壇に遺骨を置いておられる方がいいとは思ひなかつた。〇〇の会(遺族会)で、「何年経つけど、お墓に納める気にならないから、置いてます」と。そんなことがあつた。ハア」と、骨を聞いてびっくり「【そういうこともあった】」と」(L) 「で、まあ、それ 1 年経たずに死んでさか、やっぱりお骨がないとなつてくからは、やっぱりもういらないだとい…もう家内の死を受け止めたさうですわ。あのー、今まであんまり受け止めてなかったのもあんやろうけどもね、やっぱり。だから、そっからは、あのー寂しいのが変わりました」(I)
	後悔の念の生起 (9)	合同墓といふ選択肢への喪痛 (6)	「今、考えた「二人の遺骨を一緒に」と合葬墓に納めたらうのが良かったかな」と、だんだん月日が経つて考えれば、亡くなった直後から、そんな考え余る余るなく」(L) 「今考えた、うーん、お墓を建てなくて良かったかな。子どもたちに墓守がいなくて。合葬墓の永代供養にすれば良かったかな」(L) 「喉仏だけでも私がお墓に納めず持っっておけば良かったかな」とか。「私が死んだ時に、一緒にしてもらったら良かったかな」と、今になって時間経つてつれ思っうんです」(L) 「仏壇に遺骨を置いておられる方がいいとは思ひなかつた。〇〇の会(遺族会)で、「何年経つけど、お墓に納める気にならないから、置いてます」と。そんなことがあつた。ハア」と、骨を聞いてびっくり「【そういうこともあった】」と」(L) 「で、まあ、それ 1 年経たずに死んでさか、やっぱりお骨がないとなつてくからは、やっぱりもういらないだとい…もう家内の死を受け止めたさうですわ。あのー、今まであんまり受け止めてなかったのもあんやろうけどもね、やっぱり。だから、そっからは、あのー寂しいのが変わりました」(I)	
		分骨といふ選択肢への喪痛 (2)	「喉仏だけでも私がお墓に納めず持っっておけば良かったかな」とか。「私が死んだ時に、一緒にしてもらったら良かったかな」と、今になって時間経つてつれ思っうんです」(L) 「仏壇に遺骨を置いておられる方がいいとは思ひなかつた。〇〇の会(遺族会)で、「何年経つけど、お墓に納める気にならないから、置いてます」と。そんなことがあつた。ハア」と、骨を聞いてびっくり「【そういうこともあった】」と」(L) 「で、まあ、それ 1 年経たずに死んでさか、やっぱりお骨がないとなつてくからは、やっぱりもういらないだとい…もう家内の死を受け止めたさうですわ。あのー、今まであんまり受け止めてなかったのもあんやろうけどもね、やっぱり。だから、そっからは、あのー寂しいのが変わりました」(I)	
	手元安置といふ選択肢への喪痛 (1)	手元安置といふ選択肢への喪痛 (1)	「仏壇に遺骨を置いておられる方がいいとは思ひなかつた。〇〇の会(遺族会)で、「何年経つけど、お墓に納める気にならないから、置いてます」と。そんなことがあつた。ハア」と、骨を聞いてびっくり「【そういうこともあった】」と」(L) 「で、まあ、それ 1 年経たずに死んでさか、やっぱりお骨がないとなつてくからは、やっぱりもういらないだとい…もう家内の死を受け止めたさうですわ。あのー、今まであんまり受け止めてなかったのもあんやろうけどもね、やっぱり。だから、そっからは、あのー寂しいのが変わりました」(I)	
		手元安置といふ選択肢への喪痛 (1)	「仏壇に遺骨を置いておられる方がいいとは思ひなかつた。〇〇の会(遺族会)で、「何年経つけど、お墓に納める気にならないから、置いてます」と。そんなことがあつた。ハア」と、骨を聞いてびっくり「【そういうこともあった】」と」(L) 「で、まあ、それ 1 年経たずに死んでさか、やっぱりお骨がないとなつてくからは、やっぱりもういらないだとい…もう家内の死を受け止めたさうですわ。あのー、今まであんまり受け止めてなかったのもあんやろうけどもね、やっぱり。だから、そっからは、あのー寂しいのが変わりました」(I)	
	読者の到来 (3)	現実の容認 (3)	「で、まあ、それ 1 年経たずに死んでさか、やっぱりお骨がないとなつてくからは、やっぱりもういらないだとい…もう家内の死を受け止めたさうですわ。あのー、今まであんまり受け止めてなかったのもあんやろうけどもね、やっぱり。だから、そっからは、あのー寂しいのが変わりました」(I)	

#### カテゴリー 6：【後悔の念の生起】

このカテゴリーは、〈他の選択肢があったことへの後悔〉として、時間の経過と共に「合同墓の永代供養にすれば良かった（L）」といった“合同墓という選択肢への羨望”が見られる。他にも「喉仏だけでも私がお墓に納れずに持っておけば良かった（L）」といった“分骨という選択肢への羨望”、「仏壇に遺骨を置いておられる方がいるとは知らなかった。…そういうこともいいんだ（L）」といった“手元安置という選択肢への羨望”など、後になって合同墓・分骨・手元供養などの方法があったことを知り、後悔の念が渦巻く場合もあることが確認できた。

#### カテゴリー 7：【諦念の到来】

このカテゴリーは、〈現実の容認〉として「家内の死を受け止めた（I）」・「どういふか諦めが…、『ああ亡くなったんだ』と（O）」といった声があるように、納骨という儀式により改めて大切な配偶者の死を体感し、諦めとして受け止める様子がうかがえた。

#### 4-3. ストーリーラインおよび概念図の作成

以上の分析結果から、配偶者を亡くした人が納骨という営みを通してどのような心理的変容が生じたのかについての概念図が作成された（【図2】）。この図の縦軸は、文書セグメント（語り）の多少を表し、横軸は納骨前後の時間経過を示したものであるが、あくまで便宜上作成したものである。実際には、各カテゴリー間の関係性や時間経過はこのように単純に表せるものではなく、より複雑な構成で成り立っている。

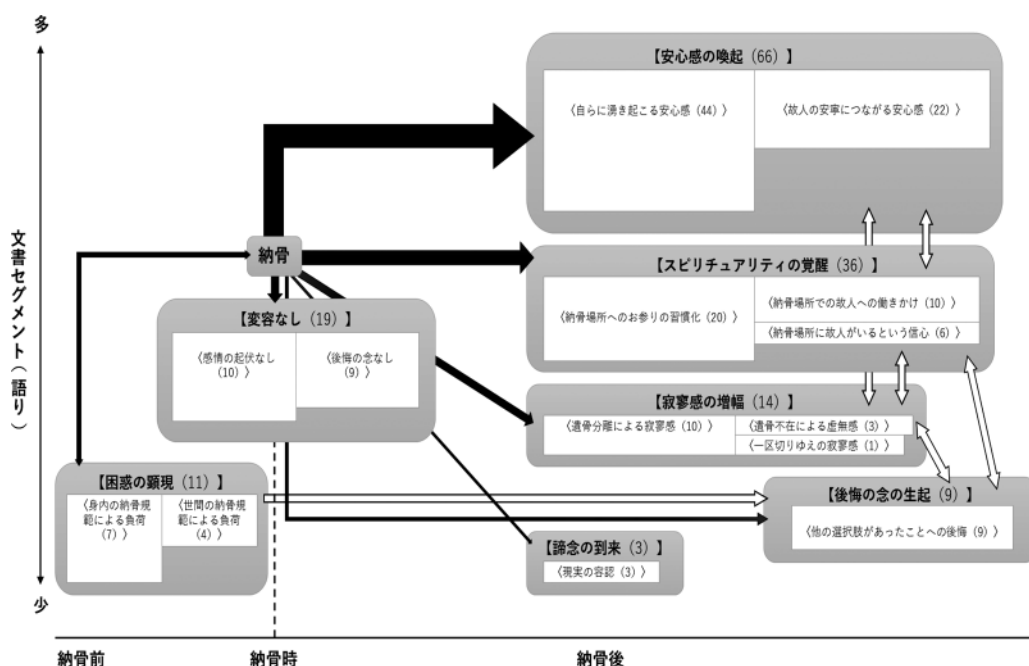


図2 納骨に伴う配偶者を亡くした人の心理的変容に関する概念図

作成された概念図をもとに、納骨に伴う心理的変容を概観すると、まず、納骨前にイエ（身内）や地域（世間）の納骨規範が強い場合には、【困惑の顕現】が見出される。納骨に伴う心理的な【変容なし】と語られる場合もあるが、一方では「一区切り」や「役割遂行」による安心感、また、故人が次の住み処に赴いたと思いつけることによる安心感を得る（【安心感の喚起】）といった流れが最も多く認められる。次に挙げられるのが、納骨場所へ頻繁に参ったり、その場で故人に話しかけたり、その場に故人がいるという信心が芽生えたりという【スピリチュアリティの覚醒】も把握される。また、すべての遺骨を納めずに、分骨という選択を採ることで胴骨を納めやすくなること<sup>27)</sup>が示唆されるが、特に分骨せずに納骨する人たちにおいては【寂寥感の増幅】が生じやすいことも見出される。さらに、数は多くないが、納骨後に合同墓・分骨・手元供養などの方法があったことを知り【後悔の念の生起】につながることもあるが、これはイエや地域の納骨規範に従い、自らの気持ちを蔑ろにしてしまった結果として生じやすいことも確認できる。他にも、故人が亡くなったという現実を納骨という儀式を通して再認識し、【諦念の到来】につながる場合も見出される。注目すべきは、納骨という営みには、同一人物中において【安心感の喚起】と【寂寥感の増幅】というアンビバレントな気持ち<sup>28)</sup>を引き起こすという現実も明らかとなった。

## 5. 考察

本研究は、納骨を実施した配偶者を亡くした人の語りから、伴侶の遺骨を手元から放すことに伴い、どのような心理的変容が生じるのかを検討したものである。

まず、納骨を実施する前の【困惑の顕現】では、〈身内の納骨規範による負荷〉と〈世間の納骨規範による負荷〉との二つが語られた。わが国においては納骨に関して「しなければならないしきたり」（若林 1989：186）が存在するため、遺族はその慣わしに戸惑い悩まされることがある。その納骨規範の内容に注目すれば、納骨時期に関すること<sup>29)</sup>、成仏に関すること<sup>30)</sup>、分骨に関すること<sup>31)</sup>などが挙げられる。いずれにしても、周囲の声の大きい際に、本来は優先されるべき遺族の気持ちが足蹴にされることにより、困惑が表れてくると示唆される。また、イエや地域のしきたりに準じて納骨してしまった場合には、後から他の選択肢もあったことを知り、【後悔の念の生起】につながると解される。

納骨による心理的変容として、最も語られた【安心感の喚起】のなかでも“一区切りによる安心”は、Neimeyer（2000/2006：105）が葬儀や法事の有益性として、「当事者の深い悲しみを軽減し、共同体の絆を再確認する役割がある」と示す内容とも符合する。そして、日本対がん協会会長の垣添（2011：17-18；135-137）は、納骨に関して「区切りのセレモニー」・「節目」になると、その効用を自らの実体験から明言する。同様に、本調査でも一つの「区切り」となることが確認された。次に、“分骨による安心”に関連することとして、Silverman & Nickman（1996：73-86）やNeimeyer（2000/2006：78；219-221）などは、故人とのつながりを保つ方法の一つとして、「故人の形見をとっておく」ことを提案するが、先の養老（1992：41）や井上（2004）が述べるように、遺骨も形見の一つとして考えられるため、分骨することにより故人とのつながりが保持されることで安心が得られると示唆される。ここで注意すべきは、伴侶

の死を容認することができないほど、あるいは日常生活に支障をきたすほどに遺骨にしがみついてしまうことである。なぜなら、過度な執着は、不健康なつながり（好ましくない死別適応）の兆しがあると指摘されるからである（Rando 1993）。そして、「役割遂行による安心」は、先のしきたりから生じる責任義務を果たすことによる安心もあろうが、「儀式に関してはあらかじめ決められた手順があり、その手順に従って行いさえすれば地域社会から確実に助けが得られ、また、正しいやり方ですべてが行われているという安心感」（Sanders 1992/2000：241）も付随していると考えられる<sup>32)</sup>。また、これらの〈自らに湧き起こる安心感〉と〈故人の安寧につながる安心感〉とは、別個のものではなく、関連するものと示唆される。なぜなら、遺族は愛する故人が「あの世かどこかしかるべきところに安らかに眠っている（過ごしている）」と思えること、つまり、「死者が安らかでなければ、遺された生者の側も安らかではいられない」（小高 2008：192）という側面もあると考えられるからである。

納骨による心理的変容として二番目に多く語られた【スピリチュアリティの覚醒】であるが、死別悲嘆は、日常の経験を超越してスピリチュアリティを覚醒させ、スピリチュアルな成長を促す可能性があるとの見解（Chen 1997）を後押しする結果といえる。生成された〈納骨場所へのお参りの習慣化〉や〈納骨場所での故人への働きかけ〉は、故人とのつながりを適切に保つ方法の要素とする見方もあれば（Silverman & Nickman 1996：73-86）、一方では、遺族のなかには「悲嘆の苦痛に満ちた気持ちを起こす場所や物を避ける」場合があり、墓もその一つであるとの見方もある（Worden 1991/1993：36）。特に、Worden は、「遺された人が墓地や遺物のある土地に行くことは、喪失についての現実感を強めることになる」場合があるため、「悲嘆作業の一端として墓参りを勧める必要のある人たちがいるが、その提案には十分な注意、感受性、そして時を見きわめる目が必要である」（1991/1993：56）と警鐘をならしている。つまり、状況次第では、〈納骨場所へのお参りの習慣化〉や〈納骨場所での故人への働きかけ〉は、死別の現実感を高揚させ、悲嘆を増幅させかねないという懸念が残る。

そして、納骨には、先に言及した【安心感の喚起】の一方で、【寂寥感の増幅】をもたらす場合もある。本調査における配偶者を亡くした人にとっての遺骨の意味合いに関する質的分析については、紙幅の関係上、別稿に譲ることにするが、既述した井上（2004：83）がいう「故人の一部であるという確かな存在感」を有しているとの指摘や、先述した新聞記事の考察（1-2/【表1】）からも「遺骨の擬人化」は顕著なものである考えられる。さらに、わが国における昨今の宗教的行動の一つとして、「霊の依り代としての遺骨との対話」（井上 2006：186）が述べられる。そうであるならば、納骨のために手元にある遺骨を手放すのは容易ではないと考えられることから、〈遺骨分離による寂寥感〉・〈遺骨不在による虚無感〉が語られるのであろう。これに関連することで付言すれば、健康科学分野におけるグリーフケア啓蒙書のなかには、「遺骨を手放すのが納得いかないなら、気が済むまで、できるだけ傍らに置いて構わない」と明記されるもの（宮林 2008：218）も出てきているため、人文学や社会科学分野などでも同様に、遺族に寄り添った弔い（「遺骨の処し方」）のあり方について議論<sup>33)</sup>が深まることが望まれる。〈一区切りゆえの寂寥感〉については、今回の調査では多く語られることはなかったが、法事などが一段落して生活の平常化が進むと、急に寂しさが襲ってくるとの報告は散見される（若林



1998：71、坂口 2012：60）。

また、僅かではあるが、納骨による【諦念の到来】も見出された。納骨に限った言及ではないが、葬儀などの伝統的な儀式は「多くの遺族を死の受容へ導く助けをする」（Worden 1991/1993：16）、あるいは「受け入れる手助け」（Sanders 1992/2000：243、坂口 2010：148）になると論じられてきた。しかし、わが国における宗教の形骸化（坂口 2010：147-148）や「死後の物語の不在」などの波によって、故人のゆくえがあいまい<sup>34)</sup>となり、死の受容の困難化も指摘される（坂口 2019：184-185）。

最後に概観すれば、遺骨を手元に置くことは、故人との「外的なつながり」を保つことになる。一方、納骨のために遺骨を手放すことは寂寥感をもたらすが、同時に、一つの区切りになったり、伴侶が亡くなったという現実の再認識になっていたりした。手元から遺骨を分離することを通して、故人との関係性は、徐々に「内的なつながり」に変容していくのではないかとされる<sup>35)</sup>。つまり、納骨という営みは、「外的なつながり」を手放すことを意味するが、決して故人とのつながりを断ち切ることではない。なぜなら、遺族の心中に故人が内在化される形で新たな関係（「内的なつながり<sup>36)</sup>」）が育まれていくと考えられるからである。

以上、本考察は、研究協力者における納骨に伴う心理的変容の同質性をふち取ったものであるが、当然かなりの個人差が見られるという実態を看過してはならない。そして、本研究は19人という限られた研究協力者（配偶者を亡くした人）を対象としたものであり、今回の調査で生成された概念モデルを一般化するには限界がある。なぜなら、遺族会（死別の悲しみを分かち合う会）参加者の特性として、悲嘆が強い傾向も考えられるからである。また、各々の夫婦関係、遺骨観、死生観といった関連要因を丁寧に見ていく作業も必要である。さらに、過去を想起する形での調査ゆえ、研究協力者の記憶の減退や変容、感情の減衰の可能性も否定できない。

なお、「遺骨の処し方」に関しても、手元供養が広がりつつあるが、遺骨に対して過度な愛着は悲嘆を増幅させ、不健康な生活に陥りやすくなる可能性も考えられる<sup>37)</sup>。それゆえ、あらためて死別後の適応という観点から、どのような状態の遺族、あるいはどのような形態のつながりなら有益であるかを検証していく必要がある。加えて、地域差・世代差・性差などによって、どのような違いが生じるのかについても今後の課題としたい。

## 6. 結語

配偶者を亡くした人にとって、亡き伴侶の「遺骨を手放すこと（納骨）」による心理的変容として、主に次の三点が明らかになった。

- 1) 納骨は、安心感をもたらす反面、寂寥感を増幅させる場合がある
- 2) 納骨を実施するにあたり、イエや地域に存在する慣わしに戸惑い悩まされる場合がある
- 3) 周囲の声に準じて早々に納骨すると、後から他の選択肢があったことを知り、後悔する場合がある

死生学を専門とする坂口は、遺骨の処し方について、「どのように扱うのかは、人それぞれで



あつてかまわない。決して周囲から強制されるべきものではなく、自分の気持ちと相談しながら時間をかけて判断すればよい」(坂口 2019: 110)と提言する。また、納骨の時期に関しても「信頼できる宗教者の意見を踏まえつつも、自分の気持ちと相談しながら決めていくのが望ましい」(坂口 2012: 141)と述べる。本研究でも、最終的に自らの意思を優先して納骨した場合、「納得済みゆえ」に〈後悔の念なし〉という結果が確認できた。つまり、イエや地域のしきたりを考慮しつつも、焦ることなく、各家にとっての納得できる「納骨のあり方(遺骨の処し方)」を模索する必要がある。

#### あとがき

共同執筆者である関西学院大学の坂口幸弘先生には、本研究の調査の実施および分析における協力をはじめ、研究全般にわたりご指導をいただきました。また、調査の実施にあたり、遺族会事務局の泉原久美氏にも多大なるご尽力をいただきました。ここに記して謝意を表します。

#### 注

- 1) 『衛生行政報告例』(厚生労働省)によれば、火葬率が50%を超えたのは1935年(昭和10年)であり、それまでは土葬の割合が上回る。
- 2) 歴史学者の鯖田(1990: 202-203)によれば、「先進文明諸国で日本ほど火葬率のたかいところはどこにもない」とし、さらに、普及した大きな要因として、遺された家族が持つ「死後のすみかをとめたいとの家族意識」を挙げ、「日本人の家族墓所志向が多分に火葬の推進力になった」との見方をする。
- 3) 本研究における「遺骨」とは、「ある特定の人物の遺体を火葬することによって生じた骨」と定義する。
- 4) 「納骨」とは、広義には「火葬にした遺骨を骨壺や墓などに納めること」(『国語辞典』第3版 2012 集英社)、「遺骨を納骨堂や墓におさめること。特に火葬に伴う習俗といえる。葬送儀礼の一環としてみれば遺体処理の一つの方法」(『岩波 仏教辞典』1989 岩波書店)などの意であるが、本研究における「納骨」とは、後者の「遺骨を墓・納骨堂・合祀塔・供養塔など、ある一定の場所に納め、手元から手放す営み」と定義する。
- 5) 本研究における「遺骨の処し方」とは、換言すれば「遺骨にまつわる事柄」を示す。そして、大別すれば、遺骨を手放すこと(納骨など)と遺骨を手元に置くこと(手元供養・分骨など)に分類される。前者は、従来どおりの墓・合同墓・納骨堂などに納める場合と、比較的新しい葬法である散骨・樹木葬・ゼロ葬などの場合がある。後者は、手元供養といわれるもので、遺骨を加工する場合と加工しない場合、安置する場合(納骨容器型・遺骨オブジェ・遺骨プレートなど)と携帯する場合(小型収納型・カロートペンダント型・リング型など)などがある。
- 6) 伝統的に育まれてきた喪の文化(弔いの文化)は、地域共同体の弱体化や慣習の希薄化に伴い、弱まりつつある。換言すれば、各地域で伝統的に築かれてきた遺族に対するサポートが弱まることを意味するため、遺族のグリーフワーク(悲嘆の作業)が個人化・孤立化する傾向にある(碑文谷 2003: 93-95; 297・2006: 161)と考えられる。
- 7) たとえば、わが国の「遺骨の処し方」は、恐怖・畏怖の念ゆえに「忌避する」時代から、愛慕追惜の念ゆえに家単位で「保存・承継する」時代に移ってきたが、今では家族構造の変化に伴う継承者不足問題で困難になってきているとの指摘もある(森 2014: 76)。
- 8) 文化は、悲嘆を形作り、制限し、定義するなどさまざまな影響を及ぼすこと(Rosenblatt 1993、坂口

- 2010：142-144）が指摘されるように、わが国の納骨文化は遺族の悲嘆に作用していると示唆される。たとえば、Seale（1998：198）は、**grief**（悲嘆）を「死別した者の感情」、**mourning**（哀悼・喪）を「ある文化のなかで死別した者にとって適切であると社会的に規定された行動」と明確に分ける（澤井 2015：18 参照）。坂口（2010：9）も、「悲嘆は喪失に対する個人的な反応であるのに対して、喪は社会規範に基づく悲嘆の社会的な表現であり、儀礼的で、両者は基本的に区別される」と説明する。つまり、わが国の遺骨文化も日本文化に統制された **mourning** の儀礼として生成され、今後も時代の流れに沿った変容を遂げていくと考えられる。
- 9) 本研究における「分骨」とは、遺骨の一部を分けて別の所に納めることを示すのではなく、「遺骨の一部を分けて、手元に置く営み」と定義する。
- 10) 遺骨へのこだわりに関しては、山折（1986：326-345）、坂口（2010：146-147）、大河内（2012：84-85）、西岡（2019b：223-226）なども参照されたい。
- 11) 日本人遺族は、「死者に対する想い」ゆえに「遺骨へのこだわりの文化」が育まれてきたという意見もある（碑文谷 2003：15）。このような遺骨への関心の高まりは、「骨は往生が実現するまでの靈魂の依り代として宗教的な意義を付与された」中世後期に幕開けしたとの指摘もある（佐藤 2008：127-128）。さらには、「穢れた死骸には穢れた死霊が宿るのにたいし、腐敗と流出のプロセスを経たのちの遺骨には浄められた祖霊が宿る」といった見方（山折 1986：345）や、「靈魂の存在を否定する人であっても、肉親の白骨を前にすれば、特別な感情を抱く…ある意味では、現代の日本人は、遺骨を故人の靈魂と同一視している」といった理解もある（新谷・古川 2017：45）。
- 12) たとえば、宗教学者の山折（1986：345）は、わが国の中世における遺骨観として、「遺体を極度に圧縮した『骨』という堅固な遺存物は、『霊』という不可視な存在が穢から浄へと推移する過程を、集約的に象徴する呪具として祭祀の対象」とされていたと分析する。また、民族学者の中村（2006：43）は、「いまや死者の遺骨や遺灰は葬と供養といった旧来の靈的・宗教的行為に属するのではなく、生者が死者を追憶し想像するメモリアリズムという目的のために利用され応用される新しいアイテム」になっていると、遺骨の「脱宗教化」を示し、日常的に共存しやすい対象に移行していると指摘する。さらに、社会学者の井上（2007：1258）も、遺骨は「個人の生きた証」として、「確かな祭祀の対象」になりつつあると述べる。
- 13) たとえば、故人との思い出を「形」として残したい遺族は遺品整理を行わず、一方、「記憶」として残せば充分という遺族は遺品整理を行う傾向にあること（西岡 2019a：157-162）などが挙げられる。
- 14) 僧侶の秋田（2009：107）は、近年における遺族の「遺骨の処し方」の一つとして、納骨せずに、ペンダントや指輪に加工して携帯したり、小さな容器に入れ自宅安置するなど、「何かの形に意匠化」することによって、埋葬という概念に縛られない供養スタイルが生じていることを指摘する。手元供養については、中村（2006：37-52）、井上（2006：176-183）、小谷（2017：128-133）なども参照されたい。
- 15) 新聞記事は、2000 年以降のものとし、朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル」・毎日新聞社「毎索」・日本経済新聞「日経テレコン 21」・産経新聞社「産経新聞データベース」・読売新聞社「ヨミダス歴史館」のデータベースサービスを使用し、《納骨》、《遺骨》、《遺族》をキーワードとして、組み合わせて検索した（2019 年 7 月 4 日にデータにアクセス）。データの選択基準として、検索された記事のうち、故人と遺族の続柄、死別経過期間、遺族の「納骨の処し方（納骨、未納骨、分骨、手元供養など）」についての声もしくは心境について明記されていないもの（不明瞭なもの）は除外した。
- 16) 遺族が葬儀をせず、遺骨も引き取らず、墓などもつくらない「ゼロ葬」が一部で広がっている。「クローズアップ現代」という NHK 番組において特集されたことにより（「あなたの遺骨はどこへ——広がるゼロ葬の衝撃」2016 年 9 月 21 日放映）、「ゼロ葬」という選択肢もあることが注目された。ちなみに、遺族が火葬場で遺骨を引き取らない「ゼロ葬」を提唱したのは、宗教学者の島田裕巳（2014）である。さらに、わが国では引き取り手のない遺骨や捨てられる遺骨が増えている状況にある（碑文谷 2003：14-15、NHK 取材班 2019）。ちなみに、2015 年度は、全国 20 政令指定都市において、2006 年度の 2 倍に近

- い7,360柱の遺骨を自治体が引き受けた。2006年から2015年の10年の間に、20市は、計57,226柱の遺骨を引き受けたという（朝日新聞DIGITAL、2016年12月30日）。
- 17) 該社は、1932年に創業し、今では67の会館において葬祭事業を展開する。そして、社会貢献活動の一端として、大阪本社にて約15年にわたる遺族会（遺族サポート）を開催する（2019年3月末現在）。
  - 18) 『平成30年度版高齢社会白書』（内閣府）によれば、わが国の総人口は1億2,671万人、65歳以上人口は3,515万人。高齢化率は、1950年には5%に満たなかったが、1970年に7%、1994年に14%、2017年に27.7%と上昇を続けている（2017年10月1日現在）。そして、『平成30年度国民生活基礎調査』（厚生労働省）によれば、平成元（1989）年と平成30（2018）年を比較すると、高齢化の発展で、65歳以上の者がいる世帯のうち、「夫婦のみ世帯」は20.9%から32.3%へ、「単独世帯」は14.8%から27.4%へと、この30年間で割合が大きく増えている（2018年6月7日現在）。
  - 19) 配偶者を亡くした人が陥る恐れのある状態として、孤独や社会的孤立が挙げられ、社会的コミュニティーにおける居場所を失う割合が高いことが指摘される（Stroebe, et al. 1996, Wenger & Burholt 2004）。
  - 20) 質的調査は、「あまり知られていない研究領域や特別なケース（問題）、状況、環境などを探るまたは明らかにするために有効な研究方法である」といった指摘（呉 2003：169）があり、管見の限り類似の研究が見当たらない本研究に適した方法と考えたことから採択するに至った。
  - 21) 仏教徒で墓がある場合、「四十九日の忌明けか一周忌の法要に合わせて納骨するのが標準的な流れ」（斎藤 2006：198）とされる。
  - 22) 〈故人の安寧につながる安心感〉における「故人が落ち着けた」・「あの世（彼岸）に送った」・「先祖・家族が眠る場所（此岸）に送った」などの感性は、【スピリチュアリティの覚醒】とも関連するが、重複を避けるために、便宜上、【安心感の喚起】のカテゴリー内に分類する選択をした（【表3】）。
  - 23) スピリチュアリティとは、「重い病気や障害、経済的な困難、人間関係の破綻、愛する人との別れ、差し迫った死というような、危機的状況や人間の限界に直面した時、痛み（スピリチュアル・ペイン）として顕在化する性質のもの」（藤井 2010：17）であり、絶望的な状況に表に出てくるものとされる。さらに、「人生の危機に直面して『人間らしく』『自分らしく』生きるための『存在の枠組み』『自己同一性』が失われたときに、それらのものを自分の外の超越的なものに求めたり、あるいは自分の内面の究極的なものに求める機能」（窪寺 2004：8）であり、「人間存在に意味を与える根源的領域であり、同時に、人がその意味を見いだしていくために希求する、自己、他者、人間を超えるものとの関係性、またその機能と経験」（藤井 2015：58）といった内容のものである。本研究におけるスピリチュアリティとは、便宜上、機能面に焦点をあて、「危機的状況の際に、自らの存在に意味を見出そうとするために、なにかとのつながりを希求する潜在的働き」と定義する。
  - 24) 死生学者の窪寺によれば、「スピリチュアリティの覚醒」として「入信を考える（意志的变化）、信仰の力を認める（信仰的感動）、仏の心に共鳴（共鳴性）、寺院での癒しを体験、宗教的自己犠牲の愛に感動、死の解脱を宗教に期待、教会で自分のために祈られていることへの感動（祈りへの感動）」（2019：68）などの例が挙げられる。
  - 25) 大切な人を失った遺族は、尽きることのない死別の悲しみを抱えつつも、故人の「臨在感（いないけれど、いつも、近くに、いる）」・「守護感（いつも、見守ってくれている）」・「継承感（故人ならどうするだろうか）」を糧に、なんとか日常を歩み続けている傾向がある（西岡 2018：47-50）。
  - 26) Hedtke, L., & Winslade, J. (2004/2005：129) は、「死に意味を見出そうとすると、私たちの多くは、宗教、ないしスピリチュアリティという超越したものを一つ、ないしいくつか求めようとする。死後の世界、生まれ変わり、祖先の魂などについて確信を持つことによって、慰めと力強さが得られる。さもなくば、死が個人の存在の終わりをもたらすと信じることになる。これらの信念は、各自の好みとその人が属する文化の両方によって決定される」と指摘する。換言すれば、「スピリチュアリティの覚醒」は、遺族のパーソナリティや帰属文化によって左右されるが、覚醒すれば「慰めや力強さ」が獲得できるという見解である。そうであるならば、本研究で生成された〈納骨場所へのお参りの習慣化〉・〈納骨場所

- での故人への働きかけ）・〈納骨場所に故人がいるという信心〉により、遺族は「慰めと力強さ」を得ているとも考えられる。
- 27) 詳細は、【表3】の“分骨による安心”の概念を参照されたい。ちなみに、研究協力者19人中7人(37%)が、手元に喉仏(B, G, H, P, S)、あるいは遺骨の一部(F, R)を分骨して安置していた(【表2】)。
- 28) たとえば、Dさんは、納骨によって手元にある遺骨が「無くなってしまうのは寂しい」という気持ちの一方で、「一つの区切り」にしたいと三回忌に実施している。他にも、Pさんは、胴骨は納骨しているが、喉仏は自宅の仏壇に置いている。納めたら「もっと悲しくなる」という心境の一方で、「早く(納骨)した方がいい」という相反する思いに揺れている場合などが挙げられる。
- 29) 概して、身内や周囲から法要の節目となる「四十九日」(若林 1989: 186)や「三回忌」(若林 2000: 51)などに実施することを諭されたりする。
- 30) 概して、身内や周囲から「納骨しないと成仏できない」(奥野 2017: 24; 185)といわれの言葉などを投げかけられたりする。
- 31) 概して、身内や周囲から「分骨することで故人が成仏できない」と言われることにより、断念せざるを得ない場合(宮川 2014: 119-121)などもある。
- 32) たとえば、Hさんは、身内が多く集まる一周忌に納骨を実施している。それは、年忌法要などのしきたりに準じていけば「道を外さずにいける」という心境からであると語る。
- 33) 僧侶の大河内(2012: 76)は、納骨の時期や仕方に関して、「仏教僧侶が遺族の心情に最大限配慮しながらかわることが、グリーフケアの観点からも重要である」と提言する。たとえば、民俗学者の中村(2006: 45)は、一般的な通念として、遺族は「死者の遺骨・遺灰をとりあつかう排他的な権限が僧侶にある」と考えるために、勝手に「遺骨の処し方」を決められない傾向にあるという指摘などからしても重要となる。
- 34) 現代日本人遺族は、既存の死後物語(他界観)を信じたり、共有したりするのは困難になってきていると考えられるが、「自分なりに納得できるオルタナティブな他界観・靈魂観を保ちながら故人とつながり続けている」(西岡 2018: 46)という見方もある。
- 35) 遺品整理に関する質的調査ではあるが、「遺族は故人との『外的なつながり』を求める側面と『内的なつながり』を求める側面を併せ持つが、時間経過と共に後者に重心が移る傾向」(西岡 2019a: 161)を示す研究もある。
- 36) たとえば、宗教学者の島藺(2019: 112)は、「遺された者は『継続する絆』(continuing bond)を強く感じているし、亡くなった人の『内的表象』(inner representation)はその人の心の世界に大きな位置をもっていることが多い」と論じる。
- 37) 坂口・柏木ら(2001)の調査では、故人とのつながりに執着し、死別後の生活や人生に取り組もうとしない対処パターンの人は、故人とのつながりを保ちつつ、もしくは故人にとらわれないようにして、これからの生活や人生に取り組もうとする対処パターンの人に比べ、精神健康の状態が悪いことが示されている。

## 引用文献

- 秋田光彦(2009)「明日の供養を考える——変貌する葬送と日本人の死生観」山折哲雄編著『日本人と「死の準備」——これからをより良く生きるために』角川SSコミュニケーションズ: 99-112
- 池内裕美(2006)「喪失対象との継続的關係——形見の心的機能の検討を通して」『関西大学社会学部紀要』第37巻第2号 53-68
- 池内裕美(2007)「遺品や形見の持つ意味——対象喪失の心理」『セミナー年報2006』関西大学経済・政治研究所: 139-152

- 井上治代（2004）「配偶者喪失と核家族の死者祭祀——遺骨との対話が「生きがい」」『生きがい研究』第10号：65-84
- 井上治代（2006）「変貌する生者と死者の接点——葬儀・墓・仏壇のゆくえ」中村生雄編著『思想の身体——死の巻』春秋社：155-188
- 井上治代（2007）「「家庭内」死者祭祀の多様化——仏壇（位牌）から遺骨祭祀へ」『宗教研究』第80巻第4号：1257-1259
- 上村ふき（2013）「現代日本における葬送——遺骨を中心に」『惠泉アカデミア』第18号：42-61
- Wenger, G.C., & Burholt, V. (2004). Changes in levels of social isolation and loneliness among older people in a rural area: A twenty-year longitudinal study. *Canadian Journal on Aging*, 23, 115-127.
- Worden, J.W. (1991). *Grief counseling and grief Therapy: A handbook for the mental health practitioner* (2nd ed.). New York: Springer Publishing Company. (鳴澤實監訳 1993『グリーフカウンセリング』川島書店)
- NHK 取材班（2019）『さまよう遺骨——日本の「弔い」が消えていく』NHK 出版
- 呉裁喜（2003）「質的調査法」平山尚・武田丈・呉裁喜・藤井美和・李政元共著『ソーシャルワーカーのための社会福祉調査法』ミネルヴァ書房：168-202
- 大河内大博（2012）「日本社会の伝統的なグリーフケア」高木慶子編著『グリーフケア入門——悲嘆のさなかにある人を支える』勁草書房：61-90
- 大村英昭（2001）「死（デス）と喪失（ロス）に向かいあう」野口裕二・大村英昭編『臨床社会学の実践』有斐閣：285-315
- 岡村清子（1992）「高齢期における配偶者との死別——死別後の家族生活の変化と適応」『社会老年学』第36号：3-14
- 奥野修司（2017）『魂でもいいから、そばにいて——3.11 後の霊体験を聞く』新潮社
- 河合千恵子（1987a）「老年期における配偶者との死別に関する研究——死の衝撃と死別後の心理的反応」『家族心理学研究』第1号：1-16
- 河合千恵子（1987b）「配偶者と死別した老人の生活適応」『老年精神医学』第4号：160-168
- Kuckartz, U. (2002). *Qualitative Text Analysis*. (佐藤郁哉訳 2018『質的テキスト分析法——基本原理・分析技法・ソフトウェア』新曜社)
- 窪寺俊之（2004）『スピリチュアルケア学序説』三輪書店
- 窪寺俊之（2019）『死とスピリチュアルケア論考』関西学院大学出版会
- Klass, D., Silverman, P.R., & Nickman, S. (Eds.) (1996). *Continuing bonds: New understandings of grief*, Washington, DC: Taylor & Francis.
- 垣添忠生（2011）『悲しみの中にいる、あなたへの処方箋』新潮社
- 小高康正（2008）「悲嘆と物語——喪の仕事における死者との関係」平山正実編著『死別の悲しみに寄り添う』聖学院大学出版会：187-212
- 小谷みどり（2017）『〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓』岩波書店
- 斎藤美奈子（2006）『冠婚葬祭のひみつ』岩波書店
- 坂口幸弘（2001）「配偶者との死別における二次的ストレスと心身の健康との関連」『健康心理学研究』第14巻第2号：1-10
- 坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁（2001）「配偶者喪失後の対処パターンと精神健康との関連」『心身医学』第41号：439-446
- 坂口幸弘（2010）『悲嘆学入門——死別の悲しみを学ぶ』昭和堂
- 坂口幸弘（2012）『死別の悲しみに向き合う——グリーフケアとは何か』講談社
- 坂口幸弘（2019）『喪失学——「ロス後」をどう生きるか?』光文社
- 佐藤郁哉（2008a）『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社
- 佐藤郁哉（2008b）『実践 質的データ分析入門』新曜社



- 佐藤弘夫（2008）『死者のゆくえ』岩田書院
- 鯖田豊之（1990）『火葬の文化』新潮社
- 澤井敦（2015）「『死別の社会学』とは何か」澤井敦・有末賢編著『死別の社会学』青弓社：13-25
- Sanders, C.M. (1992). *Surviving grief... and learning to live again*. New York: John Wiley & Sons. (白根美保子訳 2000『死別の悲しみを癒すアドバイスブック——家族を亡くしたあなたに』筑摩書房)
- Seale, C. (1998). *Constructing Death: The Sociology of Dying and Bereavement*, Cambridge University Press.
- 島蘭進（2000）「現代宗教と公共空間——日本の状況を中心に」『社会学評論』第50巻第4号：541-555
- 島蘭進（2010）「近代日本人の死生観——その歴史的展望」『国士館哲学』第14号：1-14
- 島蘭進（2019）『ともに悲嘆を生きる——グリーフケアの歴史と文化』朝日新聞出版
- 島田裕巳（2014）『0葬——あっさり死ぬ』集英社
- Stroebe, W., Stroebe, M.S., Abakoumkin, G., & Schut, H. (1996). The role of loneliness and social support in adjustment to loss: A test of attachment versus stress theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1241-1249.
- 新谷尚紀監修・古川順弘著（2017）『現代人のための葬式とお墓の日本史』洋泉社
- 関沢まゆみ（2015）「火葬化とその意味——「遺骸葬」と「遺骨葬」：納骨施設の必須化」『国立歴史博物館研究報告』第191集：91-136
- 田中久夫（1967）「平安時代の貴族の葬制について——特に十一世紀を中心として」『近畿民俗』第43号：15-26
- Chen, L. (1997). Grief as a transcendent function and teacher of spiritual growth. *Pastoral Psychology*, 46(2), 79-84.
- 富井真由（2016）「仏教から見る葬制・墓制の沿革と遺骨信仰」『文化学研究』第25号：195-210
- 中村生雄（2006）「〈死〉とどのように向き合うか——「死と生」をめぐる現代の風景」中村生雄編著『思想の身体——死の巻』春秋社：3-63
- 中村一基（1999）「『祖霊祭祀の日中比較研究』平成11年度研究報告」白骨と遺骨崇拜』『岩大語文』第8号：1-9
- Neimeyer, R. (2000). *Lessons of loss: A guide to coping*. Keystone Heights, FL: PsychoEducational Resources. (鈴木剛子訳 2006『〈大切なもの〉を失ったあなたに——喪失をのりこえるガイド』春秋社)
- 西岡秀爾（2018）「遺族の他界観に依拠した支援の検討——故人のリアリティへの配慮」『人権教育研究』第26号、花園大学人権教育研究センター：31-61
- 西岡秀爾（2019a）「グリーフケアの観点から見る遺品整理——遺族への質的調査から」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要（第20回）』：157-162
- 西岡秀爾（2019b）「ビリーフメントケアにおける仏教の役割」『「社会を作る人」を作る——だれもが生まれてよかったと思える社会に』批評社：195-239
- 碑文谷創（2003）『死に方を忘れた日本人』大東出版社
- 碑文谷創（2006）『新・お葬式の作法——遺族になるということ』平凡社
- 藤井正雄（1988）『骨のフォークロア』弘文堂
- 藤井美和（2010）「生命倫理とスピリチュアリティ——死生学の視点から」藤井美和・浜野研三・大村英昭・窪寺俊之編著『生命倫理における宗教とスピリチュアリティ』晃洋書房：1-27
- 藤井美和（2015）『死生学とQOL』関西学院大学出版会
- Hedtkke, L., & Winslade, J. (2004). *Re-membering Lives: Conversations with the Dying and the Bereaved*. New York: Baywood Publishing Company. (小森康永・石井千賀子・奥野光訳 2005『人生のり・メンバリング——死にゆく人と遺される人との対話』金剛出版)
- 宮川さとし（2014）『母を亡くした時、僕は遺骨を食べたいと思った。』新潮社
- 宮林幸江・関本昭治（2008）『愛する人を亡くした方へのケア——医療・福祉現場におけるグリーフケアの



実践』日総研出版

森謙二（2014）『墓と葬送のゆくえ』吉川弘文館

山折哲雄（1986）「靈魂の浄化——遺骨崇拜の源流」『日本民俗文化体系 第12巻 現代と民俗——伝統の変容と再生』小学館：309-372（山折哲雄 1990『死の民俗学——日本人の死生観と葬送儀礼』岩波書店に収録）

山折哲雄（1993）「中世の骨——仏舍利信仰と遺骨信仰」埴原和郎編著『日本人と日本文化の形成』朝倉書店：158-170

山折哲雄（2011）『「始末」ということ』角川学芸出版

養老孟司（1992）「個人の死と社会の葬儀」『季刊 仏教』第20号：40-49

Rando, T.A. (1993). *Treatment of complicated mourning*. Champaign, IL: Research Press.

Rosenblatt, P. C. (1993). Cross-cultural variation in the experience, expression, and understanding of grief. In D. P. Irish, K. F. Lundquist, & V. J. Nelsen (Eds.), *Ethnic variations in dying, death, and grief: Diversity in universality* (pp.13-19). Washington, DC: Taylor & Francis.

若林一美（1989）『デス・スタディ——死別の悲しみとともに生きるとき』日本看護協会出版会

若林一美（1998）『「悲しみ」を超えて生きる』講談社

若林一美（2000）『死別の悲しみを超えて』岩波書店

